

『グリム童話と日本昔話 比較民話の世界』

加藤 耕義

はじめに

本書は、昔話の国際比較研究の論考である。第一章から第六章までは、個々のテーマに基づいた国際比較研究であり、第七章は比較研究の基礎を築いてきた研究者たちとその研究についての概説である。

第一章から第六章までの比較研究を貫いている二本の太い柱は、世界の口承文芸研究の起点となったグリム兄弟の『子供と家庭のメルヒェン集』と日本における口承文芸研究を切り拓いた柳田國男の研究である。高木氏による比較研究は『子供と家庭のメルヒェン集』を起点に、その「原注」とヤーコブ・グリムによる大著『ドイツ神話学』を介して、ゲルマン神話や『エッダ』へと視野が広がり、また柳田國男の研究を

通じては『古事記』に至るまで神話の世界へと視野が広がる。そして歴史的比較研究の軸をなすのは、グリムの「原注」を基礎に生じたフィンランド学派のアールネ・トムソンの『昔話の話型』(一九六一)(略号AT)、および池田弘子の『日本昔話の話型とモティーフ・インデックス』(一九七二)などである。池田はトムソンの指導のもとこの話型カタログを著した。したがってATと同じ体系に基づいた話型カタログであり、本書では日本の昔話と西欧の昔話を比較する際の橋渡しの役割をしている。さて以上はいずれも四〇年以上前の資料になるが、最新の研究成果は、二〇一五年について第十五巻で完結した『メルヒェン百科事典』⁽³⁾によって補われている。

高木氏による各章の研究は、右には挙げ

切れない幅広い先行研究にのっとった実証的な論考であり、比較研究における多様な視点を示している。

まず、目次を示すが、最初の六つの章が比較研究である。

第一章 果実からの誕生―三つのオレンジ(スペイン民話)／瓜子姫(島根県)

第二章 羽衣物語―七羽の鳩(ドイツ民話)／天人女房(島根県)

第三章 呪敵逃走―水の魔女(KHM七九)／三枚の御札(新潟県)

第四章 骨のフォークロー―歌う骨(KHM二八)／踊る骸骨(新潟県)

第五章 兄弟を捜す妹―六羽の白鳥(KHM四九)／七羽の白鳥(南西諸島)

第六章 橋の不思議―橋の上の宝の夢(ドイツ伝説)／味噌買ひ橋(岐阜県)

第七章 比較民話―研究の歴史(グリム兄弟／柳田國男／C・G・ユング)

個々に取り上げられているものは、よく知られた昔話や伝説である。各章は独立

しているが、すべて通して読むと六つの章に共通のテーマが見えてくる。それは、誕生と死と再生であり、またマックス・リュティがいいう意味での此岸と彼岸との触れ合いである。もちろんこれは、魔法昔話または本格昔話と呼ばれる説話群や伝説においては当然のことともいえるが、高木氏の論を読み進めていくと、いずれの場合においてもそうしたテーマが根底にあることがはっきりと浮かび上がってくる。そこに高木氏の、昔話の魅力の本質を捉えた研究、比較研究の一貫した態度を読み取ることができる。次に個々の章について見ていきたい。

第一章 果実からの誕生―三つのオレンジ（スペイン民話）／瓜子姫（島根県）

この章は、「誕生」「輪廻転生」「敵対者」という大きな三つのテーマに分けることができる。高木氏の研究法についても触れたので、少し詳しく扱う。

《誕生について》

誕生に関して高木氏はまず、日本の「瓜

子姫」についての柳田國男の説を紹介する。それによれば、柳田國男は『桃太郎の誕生』において、「異常の経過を取って人界に出現した童子が、後に成長して異常の事業をなし遂げたという要点」において「桃太郎」と「瓜子姫子」が共通していることを指摘し、さらに「川上の清く高き処」から流れて来た瓜子姫（＝異常誕生）、卓越した機織りの技能を持つ（＝異常の事業）彼女の姿には、織姫＝神に仕える少女＝巫女という遙かな宗教的要素が投影されている」という内容を述べている。

この日本の「瓜子姫」とスペインの「三つのオレンジ」の誕生に関する共通点として、高木氏は「果物からの誕生という（奇瑞）を挙げる。そしてV・プロップの説を引いて、そこに共通するのは果物（植物）の豊穡の力であると指摘する。また、違いとしては瓜子姫は桃太郎同様（小さき子）であるが、スペインの「三つのオレンジ」やイタリアの「三つのシトロネ」では、それが裸の成人女性であることを指摘している。ちなみに、アールネ／トムソンの話型カ

タログにおいては、このモティーフは「D七二・五 果物（花）を開けて魔法を解くことによる果物から救済」に振り分けられている。一方「瓜子姫」に池田カタログが付いているモティーフ番号は「T五四三 植物からの誕生」である。おそらくトムソンは「三つのオレンジ」で、果物から出て来るのが赤子ではないために、「(T553.1. Birth from orange. という番号があるにもかかわらず)「果物からの救済」としたのだらう。確かにペンタメローネの場合には、「どんな罪のないひとでも、彼女を見れば、欲望の絞首台に送られたことでしょ」とあることから「裸」が性的な意味合いも持っていることが読み取れるが、同時に「裸」には誕生の意味合いもある。実際ペンタメローネには「このシトロネから生まれた美しい乙女 (così bello pantofole no ciro)」とも書かれている。高木氏は、トムソンがモティーフとして「果物からの救済」としたことは問題にせず、「誕生」として比較しているが、これは日本の昔話から類推するに正しい態度であらう。

「3つのオレンジ」においても「3つのシトロン」においても、果物から乙女が出てくることは、「救済」や後にみるように「転生」、「変身」と解釈することもできるが、「誕生」と理解することになんら不合理な点はない。

《輪廻転生について》

『メルヒェン百科事典』が「3つのオレンジ」はベルシャ起源であり、主人公の鳥や樹木への変身には東洋的な輪廻思想が認められると推察していることを高木氏は紹介している。そして、瓜子姫がアマノジャクに食べられてしまう新潟や福島の話為例に、物語の最後にアマノジャクが籠に乗っていることを鳥が暴露することについて、高木氏は、この鳥は瓜子姫の生まれ変わりの霊鳥であるとし、ここに輪廻思想の名残を見る。

《敵対者について》

さて、高木氏がこの類話比較において重視しているのが、敵対者の存在である。「瓜子姫」に登場するアマノジャクについて、高木氏は柳田の「アマノジャクが神の

計画の妨碍者であり、しかも通例は〈負ける敵〉であったことは、弘く他の民間伝承にも認められる」ということばを引用し、「意地悪で常に神に逆らうものの、神に匹敵するほどの力はなく、『常に負ける者の憎らしさと可笑味とを具えていた』『ワキ役』、アマノジャクの本性を柳田はそこに見る」とまとめている。

一方、「3つのオレンジ」の敵役「ジプシーの魔女」については、十五世紀以来迫害されてきた「ジプシーの受難の歴史」や「魔女裁判」の歴史が「ジプシーの魔女」に反映されていると高木氏は指摘する。そして「瓜子姫」の敵役であるアマノジャクが、主人公を危機に陥れる恐怖の存在である一種の妖怪であるのに対して、西洋の敵役は階級や身分差を示す社会的な存在というニュアンスが強いとし、「柳田國男はこのアマノジャクに、ある種、トリックスターのな性格を認めていたが、別の観点から見ると、この怪物の背後には、何か歴史的なものが隠されているのではあるまいか」と推論する。

こうして見ると、高木氏の比較のひとつのおもしろさは、日本の昔話の根底にある信仰や歴史背景をさぐり、それを西欧の類話に見ることはできないか（誕生がその例）、または西欧の昔話の根底にある信仰や歴史背景をさぐり、それを日本の類話に見ることはできないか（輪廻と敵対者がその例）と考察するところにあると思う。こうした比較によって、表には見えていない昔話の奥底に潜んでいるものが浮かび上がってくるようである。

第二章 羽衣物語―七羽の鳩（ドイツ民話）／天人女房（島根県）

この章の大きな注目点は、柳田のいうところの「昔話の驚くべき東西の一致」である。この章では、島根県の「天人女房」、ドイツの「七羽の鳩」に加え、最古の記録として、四世紀中国の『搜神記』、また日本記録としては七二四年『近江国風土記』を紹介し、いずれも、娘（神女）たちの「衣」が鳥の羽であることに注目する。そして五世紀頃に記録されたアイスランド

『エッダ』の「ヴェルンドの歌」を類話として挙げ、『搜神記』『近江国風土記』『エッダ』の「ヴェルンドの歌」がこれほど早い時期に、しかも時代的にも近い時期に東西に流布していた不思議を指摘し、これらの類話に「白鳥処女」の原風景を見ることができると述べる。

また、エスキモーの「人間の妻になった鴨」やアイヌの「ルルバの少年」を紹介し、ユーラシア大陸の東端沖（日本）から西端沖（アイルランド）まで東西に広く伝承されていることが示されている。この広がりについて『メルヒェン百科事典』にて、この分布が北部ユーラシアのシャーマニズム地域と一致し、密接な関わりを推測させると述べられていることが紹介されている。この章の最初に高木氏はアールネ／トムソンの『昔話の型』に掲載されている当該話型AT四〇〇の流布している地域を挙げている。ただし、これは一九六一年までの研究成果に基づくものである。アールネ／トムソンの話型カタログはヨーロッパの資料に偏っており、またヨーロッパ内において

もむらがあることがハンス・イエルク・ウターによって指摘されている。^①その後四十年以上がたち、（池田カタログも含む）各国の新たなカタログの成果が、ウターの『国際昔話話型カタログ』（ATU）には含まれている。AT四〇〇とATU四〇〇に掲載の流布地域を比べると、おもにアフリカから中東にかけての類話がATUでは追加されている。こうした地域の類話にも目を広げると、北部ユーラシアのシャーマニズム地域以外の特徴などが新たに現れてくるかもしれないし、またはユーラシアに限らず、アフリカや西アジアも含めたシャーマニズムの地域に流布しているということが確認できるかもしれないと思う。

第三章 呪敵逃走―水の魔女（KHM 七九）／三枚の御札（新潟県）

この章ではグリム童話「水の魔女」と「めつけ鳥」、日本の「三枚の御札」、ギリシア神話「アタランテーの物語」と王女メデアの物語、日本の「古事記」が例として示されている。『メルヒェン百科事典』が

「呪的逃走」を「被追者の変身」（変身型）と「魔法の品の投擲」（障碍型）に分類していることが紹介されている。上記のものでは「めつけ鳥」のみが変身型で、ほかは投擲型である。そして高木氏は、J・グリム、柳田國男、V・プロップ等の呪敵逃走についての論考を紹介し、この話型の神話との結びつきの強さを示してみせる。

まずJ・グリムの「イルミンの道とイルミン柱 ヤーコブ・グリムの神話学論文」が取り上げられる。そこでヤーコブは、エジプト、ギリシア、北欧の逃走神話を比較している。エジプトの伝説では、穀物の母イシス（デメーター）がテュホンから逃げるとき、彼に向かつて一束の穂を投げる。その穂は空一面に飛び散って、一筋の道を形づくる。高木氏はこれを、ヤーコブが壮大な光景（空を飛ぶ穀物の穂＝天の川）と重ね合わせながらイメージを豊かに描き出していると指摘する。

またヤーコブによれば、エジプトのある叙情詩では逆に、テュホンがオシリスの遺体を切り刻み、その破片をまき散らす。す

るとイシスは歩み出て、人が落ち穂を拾う

時のように、すべての破片を注意深く拾い上げる。ヤーコプはこれとギリシアの王女メデアの物語との類似性を示す。メデアは自分の子どもたちの寸断された身体を投げ捨て、彼女の敵たちはそれらを集めようと

して手間取る。

ヤーコプは次にエジプト神話を北欧神話と比較していると高木氏は次のように指摘する。「ヤーコプは、テュホン（＝リトセ）に追われるイシスを、テュホン（＝狼フェンリル）に呑み込まれる月に譬えて、エジプトと北欧の神話を二重映しにしたのである」。

そして高木氏は「ヤーコプ・グリムは呪的逃走の遙かな起源をこの天体神話と結びつけながら、以上のように、神話学的な解釈を繰り広げる」とまとめている。呪的逃走における投擲という行為が、神話学の解釈では種まきや収穫、そして死と再生、月の満ち欠けに結びつくということが面白い。

〈柳田國男〉

高木氏は、柳田が『桃太郎の誕生』で述べている逃竄説話論を次のように解説す

る。

「怖畏」は、例えば、死の現実を覗き見た古代人の衝撃（『古事記』上巻五「黄泉国」）にその遙かなる源を辿ることが出来るであろう。しかし後の時代、そうした衝撃は恐怖を疑似体験するある種の愉しみと化して、「民間文芸」へと吸収されていったに違いない。柳田は逃竄説話をその中間のプロセスに位置づけている。

そしてさらに高木氏は、柳田が『祭日考』（一九四六）の中で、別の逃竄説話である「牛方山姥」について紹介した文について、次のようにまとめる。

柳田は、恐ろしい「山姥」のもう一つの側面としての「愚かな悪者」像に注目する。彼によると、山姥は西洋の昔話の Ogre に似ている。「人に対して無法な害をするが、どこか魯鈍なところがあつて騙されやすく、従つて折々はやつつけられる」。ある意味、愛嬌のある存在なのだ（中略）「身の毛もよだつ」恐怖物語の只中にさえ、遊戯

的な要素が内在している点に、柳田は昔話の本質を見ている。

どちらの引用も共通して述べていることは、逃竄譚の昔話では本當の恐ろしさの身を抜いて面白く語っているが、『古事記』までさかのばれば、逃竄譚の根底には「怖畏」があり、それは「死」と関わっているということである。この「死」との関わりを指摘している点において、柳田もグリムや次に見るプロップとも共通している。

（プロップ）

次に高木氏はプロップの『魔法昔話の起源』での変身逃走論について引用している。プロップは動物への変身を死と仮定し、鴨のイメージが死と結びついているとし、人間へ戻るのは生への帰還であるとする。そして「変身をするのは水と関連のある存在である」とする。さらに高木氏はプロップの論を引いて、次のようにまとめる。

ところで、プロップは先の「呪的逃走」論の中で、「逃走と追跡の基本的な種類は歴史的展望に立つて見ると、死者の国から生者の国への帰還をもとにし

て作られたものである」と語り、「水、川が最後の障礙物であることが多い」と結論する。生と死の「境界としての水」である。

そして高木氏は「三枚の御札」の場合は、小僧がようやく逃げ込んだ「寺」が現世と彼岸の境界であり、呪敵逃走はその「境界」で終わりを告げると述べている。J・グリム、柳田國男、プロップの論からも、呪的逃走のメルヒェンにも死と生が深く関わっていることが浮き彫りとなり、興味深い。

第四章 骨のフォークロア―歌う骨（KHM二八）／踊る骸骨（新潟県）

まず、「歌う骨」（グリム）「踊る骸骨」（日本）、「継子と尺八」（日本）、「笛を吹く骨」（インド／パンジャブ）、「クジャクの羽」（イタリア）が類話として挙げられる。高木氏は「歌う骨」の類話の多くにおいて、犯罪（殺人）を暴くのが、人間の身体の一部（骨／毛髪）から作られた楽器（角笛／竖琴／フルート）であることに注目している。そして、「継子と尺八」において

も、楽器が犯罪の暴露に介在することで、全体の印象は哀愁を帯びた西欧のバラード調に近いと指摘する。そして、八二年頃の『日本霊異記』にある類話を示し、骨に魂が宿るという信仰がこれらの物語の根底にあると指摘する。

次に『旧約聖書』の「エゼキエル書」と『エツダ』の「ギルヴィたぶらかし」を例として挙げ、骨からの復活が描かれていることを示し、「骨が生命力の源である」という信仰は、時代や民族を超えて広く浸透しているようだ」と述べる。最後に「ねずみの木の話」（KHM四七）を挙げ、ここでは死者の魂が鳥に転生し大空を飛翔する「魂の鳥」Seelenvogel信仰、人間の魂が死後、肉体を離れて他の存在に生まれ変わる輪廻思想の表れであると指摘する。

グリムに代表されるAT七八〇の「歌う骨」は、悲しい結末で終わるが、「骨」に注目して他の説話群まで視野を広げると、死と復活がテーマとなっている説話もあり、そこには共通して魂への信仰があることが見えてきておもしろい。

第五章 兄弟を捜す妹―六羽の白鳥（KHM四九）／七羽の白鳥（南西諸島）

この章で高木氏は、この話型（AT四五二）において、「兄弟と妹（姉）というパターンが定着しているのはなぜか」「鳥への変身が圧倒的に多いのはなぜか」「ガラス山はどのような場所か」「妹が課される沈黙の試練（シャツ作りを含む）は何を意味するのか」という問いを掲げて考察している。

まず、高木氏は、親が発する呪いによる子供の心の傷を「魂の死」と捉える。そして「鳥への変身」については、ドイツの民間信仰において、鳥は霊的で予言をする存在、鳥の姿をした死者の魂とされることを挙げる。その「魂の鳥」の代表的な種類は鴉であることを、北欧神話のヴァルキューレや、J・グリムの『ドイツ神話学』から説明し、特に北欧では鴉は神聖視されており、死の世界との関わりが深く、予言能力を有することを指摘する。また白鳥についても古くから超自然的な性格を付与され、

鴉と同様、死と縁が深いとしている。

「ガラス山」については、J・グリムの『ドイツ神話学』を引用し、リトアニア人やポーランド人のもとでは、罰を下された魂は、ガラス山を登っていかなければならず、しかも足を頂上に置いた際に、滑って転落すると信じられていたこと、ドイツの昔話や歌謡では死者達の滞在場所であることを指摘し、「氷河をいただいて孤高に輝く(魂の)山といったイメージ」と述べている。

「妹が課される沈黙の試練(シャツ作りを含む)」については、行方不明の兄弟を捜す妹が、兄弟を呪縛している魔力と戦うエネルギーを沈黙によって蓄積すると解釈する。そしてシャツを織り上げることについてはJ・グリムが『ドイツ神話学』の中でヴァルキューレを例に「そのようなシャツは魔法を解くばかりではない。それは勝利を確実なものにする」と述べていることを引用し、「救済すべき兄弟のために末の妹が沈黙のうちにシャツを織る姿には、このような伝承的背景がある」とまとめる。

「兄弟と妹(姉)」というパターンが定着しているのはなぜか」という問については、J・グリムの『ドイツ神話学』を引用しつつ、困難な状況を切り抜けるための忠告や預言を与える仕事に女性に任されていたこと、そこに「ゲルマン的な女性崇拜」の起源があることを指摘し、妹が兄たちを救済するというパターンが多いのは、そうした女性崇拜の名残と推論する。

さらに、この推論が日本の伝承状況から裏付けられる。高木氏はAT四五一の類話が日本ではもっぱら琉球伝承圏に限定されていると『日本昔話通観』に書かれていることを踏まえた上で、柳田國男が「ヨナリ信仰」に注目していたことを指摘する。そしてこの南西諸島の類話が仮に西欧から伝播したものとしても、「ヨナリ神の信仰がこの地方に浸透していたがために、妹が兄弟を救済する感動的な物語であるAT四五一の趣旨は容易にここに土着し生育することができたのである」と結論する。

この章でも、昔話の奥に潜む神話の名残を見つめることで、昔話の表には見えてい

ない死と復活が浮かび上がってくる。そして、ヨーロッパと沖繩という遠く離れた地域にこの昔話が定着している背景には、類似の文化現象(女性崇拜とヨナリ信仰)があるという指摘は、とても興味深く、説得力がある。

第六章 橋の不思議―橋の上の宝の夢(ドイツ伝説)／味噌買ひ橋(岐阜県)

「橋の上の宝の夢」と「味噌買ひ橋」はAT一六四五に属する。高木氏は橋に注目することで、東西一致の不思議を探ろうとする。「橋の上の宝の夢」のより古い類話は『千夜一夜物語』にもある。高木氏によれば、グリムはそうした西アジアの類話に橋が出てこないことを指摘し、ヨーロッパの伝説において橋が重要なのは、「橋は多くの民衆が通り、また人々の集合場所である。他の折には、例えば、裁判が行われる所でもある。それゆえ、橋は宝を探る者を派遣するのに適している。そこでは最も容易に情報が入手できるからである」と述べている。

さらに、柳田國男が「味噌買橋」という論考の中で、当時ヨーロッパにおいて、架橋土木が発達し、評判になっていたので、話者が話の中心を橋にしたことが大いに当たったのではないか、そしてここが新しい文化の表現であったので、橋が古いや呪などの場所に使われ、神秘を説くのにふわしかったのではないかと推測していることを紹介している。

また高木氏は、柳田が予想したとおり日本の「味噌買橋」はヨーロッパの伝承の翻案であることも指摘している。そして柳田が「夢」と「橋」を一組で考えたことがこの伝説の解釈に新たな地平を開いたと高く評価している。

そして高木氏は、数々の伝説を引用しながら、橋と悪魔との結びつきの強さを示し、そこでは「架橋工事の困難さ故に、人間には及ばない部分を、何か超人的な力を持つ存在、例えば悪魔に人々が依存せざるを得なかった事情」を指摘する。

また橋と聖人の結びつきの強さを示し、「ヨーロッパではそれ以前から、橋梁建設

はあの世への〈架け橋〉の性格（寄進）もあつたので、橋には、様々な意味で、宗教的なものが介在していた」と指摘する。

そしてヨーロッパおよび日本の橋と亡霊や鬼との結びつきが強いことを示し、「困難な架橋工事を完成させるために、人命を犠牲にした人柱の風習」があつたことをその深層に見ている。そして、高木氏は「橋の伝説はこの〈根源〉あるいは〈原因〉を、歴史の遙かな深みから時折ふと、我々に覗かせてくれるのではあるまいか」とまとめている。

ここで扱われている「橋の上の宝の夢」等が伝説であるためか、この章ではもっぱら歴史的、現実的な側面から、説話の背景と東西の共通性が分析されている。その意味で、これまでの章とはまた別のアプローチであり、高木氏の比較研究の幅の広さうかがえる。

高木氏の論考を読んで、思い出されるのは、グリム童話（たとえばKHM二九「黄金の毛が三本ある悪魔」）にも出てくる此岸と彼岸を隔てる川である。『メルヒェン

百科事典』の「橋 (Bridge)」の項には、「太古の考え方によれば、此岸と彼岸は川によって隔てられており、渡し守か橋によって渡ることができる。最古の諸文化は渡し守しか知らず、この神話的な人物は今日まで信仰にとどまつており、多くの民族の説話に残っている。〈中略〉もちろん死者の国であれ、天国であれ、極楽のような不思議な世界であれ、彼岸への橋の概念は、人間がこの種の建築ができるようになって初めて生じたものであろう」とある。こうした此岸と彼岸の境界という概念が、ヨーロッパでも日本でも夢やお告げといった超越的な出来事と結びつく背景にあるのではないか。また、本書第一章で扱われた柳田國男の考え方も思い出される。「海から次第に遠ざかって、山々の間に入って住んだ日本人は、天から直接に高い嶺の上へ、それからさらに麓に降りたまう神々を迎え祭る習わしになっていた。だからまた谷水の流れに沿って、人界に近よろうとする精霊を信じたのであつた」⁽⁵⁾。こうした川への信仰が、そこに架かった橋という場所でお

告げがあるという物語が受け入れられる背景にあったのではないだろうか。そうした様々なことを考えるきっかけを与えてくれる論考である。

ちなみに、この章の注番号に欠落と番号のずれがあるので、本書の利用者のために、注に付しておく。⁽⁶⁾

第七章 比較民話―研究の歴史（グリム兄弟／柳田國男／C・G・ユング）

この章は、昔話の比較研究の基礎を築いてきた研究者とその理論の概説である。扱われているのは、以下の研究者たちである。A・アールネ／K・クロン（フィンランド学派）、C・G・ユング（深層心理学）、M・ラーツァルス／H・シュタインタール（民族心理学）、レヴィ・ブリュール（社会学）、W・ヴァント（民族心理学）、柳田國男。各項目が簡潔にまとめられており、また柳田國男がそれぞれの研究者のどの本を所有していたかも書かれている。比較研究を行う者にとって大いに参考になるであろう。

おわりに

これまで見てきたとおり、高木氏は膨大な資料をもとに、極めて実証的に論を進めている。高木氏の『グリム童話を読む辞典』もそうであったが、高木氏が積み重ねてきた正確な研究に基づく広範な知識には感嘆させられる。その知識の深さと広さに支えられ、本書では各章で多様な視点とアプローチの方法が示されている。昔話の歴史的比較研究を志す者にとって、大いに刺激となり、範となる本だと思う。

注

- (1) Stith Thompson: *The Types of the Folktale*. FF Communications No. 184. Helsinki 1981.
- (2) Hiroko Ikeda: *A Type and Motif Index of Japanese Folk-Literature*. FF Communications No. 209. Helsinki 1971.
- (3) *Enzyklopädie des Märchens*. Band 1-15.
- (4) Hans-Jörg Uther: *The Types of International Folktales - A classification and bibliography*. Part 1. FF Communications 284. Helsinki 2011. P.7. (ハンス・イエルク・ウター著、加藤耕義訳、小澤俊夫日本語版監修『国際昔話話型カタログ』小澤昔話研究所二〇一六年。五頁)
- (5) 『桃太郎の誕生』『柳田國男全集』第一〇巻、筑摩文庫一九九〇年、三十三頁。
- (6) 二二三頁、二一四頁の注番号の欠落と番号のずれは次のようである。注番号(二〇)→(二二)欠落。注番号のずれ：誤(二〇)→(二六)↓正(二二)→(二九)。
二〇一五年十一月 三弥井書店刊
本体二八〇〇円
(かとう・こうぎ／学習院大学)